

---

## コメント

---

### 佐藤琢三 知覚されていない〈過程〉とその言語化 —「ある／いる」「している」「した」の 選択可能性をめぐる

留守中に来客があったことを告げるのに、日本語では「お客さん、来て(いるよ)」のように「している」を使うのが普通であるのに対し、中国語では存在文を使うのが普通であり、そのため中国語話者に「いる」を使う誤用が多いといった現象が存在することが言語習得の分野で知られている。本論文では、こうした現象を対象を広げて考察している。その結果、対象をよく知っている（知悉度が高い）ほど「している」が使いやすくなること、対象が空間として認識しやすいほど「いる」が選択されやすくなることなどがわかった。対象についての認知の仕方が言語形式の選択の仕方に反映することを示した、認知言語学的研究と日本語教育の接点を示す好論文である。(1)

---

### 杉村 泰 二者会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択 —日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の比較

指示詞には「指し方」の点から、現場指示、文脈指示などの違いがある。このうち、これまでの研究は主に文脈指示などの非現場指示に関するものであった。本論文は、現場指示について、いくつかの要因を考慮して調査を行ったものである。その結果、日本語母語話者は、実際の距離より心理的距離を優先する傾向が見られることなどがわかった。指示詞の持つ様々な用法がどのようなきっかけで発動されるのかという、対照言語学的にも興味深い内容に踏み込み、研究の発展可能性を感じさせる好論文である。(1)

---

### 植松容子 韓国語母語話者、中国語母語話者の 「勘どころ」を押さえた記述とは —「スルようになる」を例に

「スルようになる」という表現は、それに相当する形式を持つ韓国語母語話者においては過剰使用が起こりやすく、相当する形式を持たない中国語母語話者には非用が起こりやすいという。そのため、それぞれの話者にどのような文法記述が必要になるのかを、上級学習者の書き言葉データ・話し言葉データに基づいて論じた論文。ネイティブ教師には気づきにくい「学習者の視点」に注意を向けることの重要性と、学習者の母語に配慮した「勘どころ」を押さえた文法記述の必要性を具体的に示す研究である。(M)

チョーハン アヌブティ

ヒンディー語を母語とする日本語学習者の格助詞ヲの習得  
——述語の他動性という観点から

格助詞には、相手を表すニ、道具を表すデ、起点を表すカラのように、意味がはっきりしているものもあるが、ヲのように様々な意味を表すものもある。本論文では、述語の他動性という観点からヲに関連するヒンディー語話者の誤用が分析されている。その結果、ヲの習得には対象に対する他動性（他動性が高いほど習得しやすくそれが低いほど習得しにくい）や意図性が影響していることが示唆された。言語理論と言語習得を結びつけて研究することの有用性を示した好論文である。(1)

薛 惠善 学習者の母語から見た機能の損失を表す「壊す」の意味  
——韓国人日本語学習者の意味習得への提言

外国語を学ぶ際に、語彙については対応物を見つけてそれで済ませる場合が多い。この方略は具体的な事物を指す名詞の場合は相対的にうまくいくが、動詞や形容詞の場合は微妙なズレが生じやすい。本論文は、「壊す」の意味を表す日本語と韓国語の動詞を比較して両者のズレを考察したものである。その結果、「壊す」は主に人工物に使うのに対し、韓国語の対応する動詞は自然物にも使えること、「壊す」は物理的な損傷がなくてもいいのに対し、韓国語の動詞はそれが必要であるといった違いが観察された。学習の盲点になりやすい点を考察対象とした好論文である。(1)

川崎一喜 テイドに関する一考察——クライとの比較を通して

「英語力は大学卒業 {ていど／くらい} が望ましい。」のように、「ていど」と「くらい」には、両方が使える場合もあれば、「過労死する {＊ていど／くらい} 働いた」のように、片方しか使えない場合もある。そのため、コーパスを用いて「ていど」の使用実態を調査し、「ていど」および「ていどに」の用法を「くらい」と比較した。結果として、高い程度から低い程度まで様々な程度を表せる「くらい」に比べて、「ていど」は低程度に偏るなど、従来の研究にはない両者の違いを指摘・考察している。(M)

朴 秀娟 「とても」における日本語学習者と日本語母語話者の  
使用実態の違い  
——話しことばを中心に

学習者が多用する副詞「とても」について、学習者と日本語母語話者の使用実態を比較し、その違いを指摘するとともに、学習者の使用が初級教科書における導入の反映と考えられることを指摘した論文。初級で学ぶ語彙や文法項目には、中級・上級になって「問題」が見えてくる項目があることを、現場の教師は経験的に気づいている。その「気づき」の重要性を示すとともに、実態を分析し、どのような指導が求められるかを論証する方法論についても具体的に参考になる研究である。(M)

疏 蒲剣 程度の判断基準から見た「かなり」類と「少し」類の違い

程度副詞「かなり」と「少し」は、「太郎は{かなり/少し}酒を飲んだ」や、比較の文「この酒はその酒より{ $\phi$ /かなり/少し}高い」のような場合はいずれも使えるが、同じく比較の文「太郎は次郎より{かなり/?少し}酒を飲んだ」では「少し」は使いにくい。いずれも程度を表すと考えられてきた2つの副詞の違いを分析した論文であるとともに、基本語彙の研究として、教育現場にもすぐに活かせる内容となっている。(M)

増地ひとみ 日本語教育で《非標準的なカタカナ表記》と  
《文字種選択の仕組み》を扱う意義  
——交通広告における調査結果を例に

「おトク」や「キレイ」など、和語・漢語をカタカナ表記した「非標準的なカタカナ表記」の実例と特徴を示し、日本語教育においてこうした「非標準的なカタカナ表記」と「文字種選択の仕組み」を扱う意義を考察した論文。日本語が世界の他の言語と比べて難しいとされる項目(あまり多くない)の筆頭に挙げられる表記の現代的な課題を扱っており、インターネットやSNSによって海外の学習者も簡単に生の日本語にアクセスできるこの時代に、教師が知っておくべき内容である。(M)

渡辺裕美・関 玲・酒井晴香・陳 琦  
逆接続詞の繰り返し使用に関するコーパス調査

逆接を表す「しかし」「しかしながら」「だが」「ところが」について、繰り返し使用されるか否かという観点から検討した論文。小論文コーパス・学術論文コーパスの使用実態調査、および母語話者を対象とした許容度調査の結果、「しかし」は繰り返し使用が許容されていることが示された。「しかし」が持つ特徴を新たに指摘するとともに、類義接続詞の研究として、新しい視点と方法論を提供している。(M)

---

金 瑜眞 韓国語学習者による句末イントネーションの生成  
——母語の影響の再検討と発話場面による影響に注目して

韓国語学習者の日本語句末イントネーションの中には、日本語母語話者にマイナスの印象を与えるものがあることが知られている。本論文は、この点を自発音声（ロールプレイ）の分析を通して再検討したものである。その結果、いくつかの点において先行研究と異なる結果が得られた。音声研究と音声教育をつなぐ上で参考になる知見が含まれた論文である。

(1)

---

関 玲 中国人日本語学習者のあいづちバリエーションの習得状況  
——来日留学生の縦断的調査を通して

上級学習者がより自然な日本語（話しことば）を習得しようとした際に何を学ばばよいかというのは重要な問題である。本論文では、あいづちのバリエーションの経時的变化という観点からこの問題に取り組んでいる。調査の結果、一部の形式のあいづちは習得が進んだものの、習得が進まないものも見られた。このように、あいづちは自然習得が難しいものであると言え、会話教育における明示的な教育が重要であることが示唆されている。

(1)

---

中野 陽 初対面の雑談相手に向けられる日本語学習者の否定表現  
——日本語母語話者との比較から

話し相手の発話を否定するという言語行動は相手との人間関係にかかわるものであるため、慎重に行う必要があり、日本語非母語話者にとってこうした否定場面でどのような調整行動を行えるかは重要な言語能力である。本論文では、初対面場面における否定表現を日本語母語話者と非母語話者で比較した結果が考察されている。その結果、母語話者は表現形式と表現内容の双方を用いて否定表現を婉曲化しようとしているのに対し、非母語話者はそうした運用が十分にできていないことがわかった。学習者にとってリスクをとまなう場面での調整行動についての研究に関する有益なデータが提供されている。

(1)

---

ゲエンティニューイー

依頼会話における《雑談部》の展開ストラテジー  
——ベトナム語と日本語の対照研究の観点から

談話分析の目的の1つに、異なる言語間で好まれる談話展開のパターンの違いを明らかにするということがある。本論文は、依頼の際にベトナム語と日本語の間に見られる談話展開の共通点と相違点を調べたものである。どちらの言語でも、本題に入る前の「雑談部」が存在する点は共通しているが、その雑談部の構成が両言語で異なり、ベトナム語では依頼内容に直接関連する内容に言及することが多い一方、日本語ではより間接的な内容が好まれる。発話行為を教える際に留意すべき点を考える上で参考になる知見が述べられている。(1)

---

小口悠紀子 談話における出来事の生起と意外性をいかに表すか  
——中級学習者と日本語母語話者の語りの比較

「対話」の力を重視する現行の日本語教育の中で、「自分の考えや出来事をまとめて話す力」を学ぶ機会が多いとは言えない。そこで、母語が中国語・英語・韓国語である中級レベルの学習者が、時間軸に沿った出来事をどのように表現しているのかを、母語話者と比較しつつ調査した。学習者の「語り」を、単に「分かりやすくする」というだけでなく、「惹きつけられるものにする」ためには何が必要なのか、という視点は興味深く、必要とされる言語表現が具体的に示されている点で現場に直結する研究となっている。(M)

---

庵 功雄 日日研が求めているもの  
——日本語学と日本語教育をつなぐために

本研究会は2009年に発足し、9月に第1回大会、翌2010年5月に研究会誌第1号を刊行した。この間も、日本語教育の現場にはさまざまな変化があり、研究の世界も一層の多様化を見せている。こうした状況の中で、本研究会がこれまでどのような研究を評価し、また今後、どのような研究を求め、応援していきたいと考えているのかということについて、具体的な研究を紹介しつつ論じている。本論文について、会員の皆様からの積極的なご意見、ご要望、ご批判、ご助言をお願いしたい。

(M)